

ぴかぴかする夜

小川未明

青空文庫

都会とかいから、あまり遠くとお離れていないところに、一本ほんの高い木たかきが立たつていました。

ある夏なつの日の暮ひれ方がたのこと、その木きは、恐ろしおそさのために、ぶるぶると身みぶるいをしていました。木きは、遠くとおの空そらで、雷かみなりの鳴なる音おとをきいたからです。

小さい時ちい分じぶんから、木きは、雷かみなりの怖おそろしいのをよく知しっていました。風かぜをよけて、自分じぶんをかばってくれた、あのやさしいおじさんの大たいばく木きも、ある年としの夏なつの晩ばん方がたのこと、目めもくらむばかりの、電いなずまといつしよに落おちた、雷かみなりのために、根ねもとのところまで裂さかれてしまったのでした。そればかりでない、この広ひろい野原のほらのそこここに、

どれほど多くおおの木きが、雷かみなりのために、打うたれて枯かれてしまったこと
 でしょう。

「あまり、大おおきく、高たかくならないうちが、安あん心しんだ。」といわれ
 ていましたのを、木きは、思おもい出だしました。

しかし、いま、この木きは、いつしか、高たかく大おおきくなっていたの
 でした。それをどうすることもできませんでした。

木きは、それがために、雷かみなりをおそれていました。そして、いま、
えんぼう遠方えんぼうで鳴なる雷かみなりの音おとをきくと、身みぶるいせずにはいられませんで
 した。

このとき、どこからともなく、湿しめつぽい風かぜに送おくられてきたよう
 に、一羽わのたかが飛とんできて、木きのいただきに止とまりました。

「わたし、山の方から駆けてきた。どうか、すこし、翼を休めさしておくれ。」と、たかはいいました。

しかし、木は、身ぶるいして、よくそれに答えることができまませんでした。

「そ、そんなことは、お安いご用です。た、ただ、あなたの身に、障りがなければいいがと思つています。」と、やつと、木は、それだけのことをいうことができました。

「それは、どういうわけですか。なにを、そんなに、おまえさんは、おそれているのですか？」と、たかは、木に向かつて問いました。木は、雷のくるのを恐ろしがつて、たかに向かつて、これまで聞いたり、見たりしたことを、子細に物語つたのであ

りました。これを聞いて、たかはうなずきました。

「おまえさんのおそれるのも無理のないことです。雷は、こちらにくるかもしれません。いま、私は、あちらの山のふもとを翔けてきたときに、ちょうど、その近くの村の上を暴れまわっていました。しかしそんなに心配なさいますな。私が、雷を、こちらへ寄越さずに、ほかへいくようにいつてあげます。」と、たかはいいました。

木は、これを聞くと、安心いたしました。しかし、この鳥のいうことを、はたして、雷がききいれるだろうかと不安に思いました。そのことを木は、たかにたずねますと、

「私は、山にいれば、雷を友だちとして遊ぶこともあるのですか

ら、きくも、きかぬもありません。「と、たかは、うけあつて、
 いいました。ちようど、そのとき、前まえよりは、いつそう、大おおきく
 なつて、雷かみなりの音が、とどろいたのでした。木きは、顔かお色いろを失うしなつて、
 青あおざめて、ふるえはじめたのです。たかは、空そらにまき起おこつた、
 黒くろくも雲もを目めがけて、高たかく、高たかく、舞まい上あがりました。そして、そ
 の姿すがたくもを雲なかの中に、没ぼつしてしまいました。たかは、黒くろくも雲もの中なかを翔か
 けりながら、雷かみなりに向むかつて、叫さけびました。

「君きみは、あんな、さびしい、野原のほらなどをおびやかしたつて、しか
 たがないだろう。それよりか、もつと、おびやかしがいのある、
 都みやこの方ほうへでもいったらどうだ。」と、たかは、いつたのです。怖おそ
 ろしい顔かおをしているが、案外あんがい、心こころのやさしい雷かみなりは、太ふといしやが

れた声をだして、

「いつたい僕は、だれをも、おびやかしたくないんだが、僕が、散歩に出ると、みんなが怖がつてしかたがない。なんという僕は不幸ものだろう。野原にいつても、いちばん高い木のとがつた、頂へ、ちよつと足を止めるばかりなんだ。どこへいつたつて、僕は遠慮をしている。都の方に、あまりいかないのも、僕の遠慮がちからなんだ。それで、いつもさびしい野原の方へ、いくようなしだいなんだ。」と、答えました。すると、たかは、空に、もんどりを打ちながら、

「よく、君の心の中は、わかつている。しかし、いつも、野原の方へいくんでは、君も、散歩のかがないというもんだ。このご

ろ、都会は美しいぜ。ひとつ、今日は、都会の方へ行ってみたらいいだろう。」と、たかはいいました。

正直で、信じやすい雷は、たかのいうことに従いました。

そして、雷は、方向を転じて、都の方へ進んでいきました。黒くもかみなりしたが、雲は雷に、従いました。そして、さながら前ぶれのようにつめい、湿っぽい風は、野面を吹くかわりに、都会の上を襲ったのです。

かみなりめした、雷は目の下に、灯火のきらきらとついた都会をながめました。

そこからは、自分の鳴る音に負けないほどの、ゴウゴウなりとどろく、汽罐のうなり音や、車輪のまわる音や、いろいろの蒸気機関の活動するひびきをききました。

この有り様あさまを見ると、雷かみなりは、ここでは、遠慮えんりよをしなくてもいいだろう、という気が起おこりました。しかし、雷かみなりは、どこへでも落ちていいというような、乱暴らんぼうな考えかんがはもちませんでした。どこか、自分じぶんの、ちよつと足あしをとめていいところはなかと探さがしました。

正直しょうじきな、やさしい雷かみなりは、黒くろい、太ふとい一筋ひとすじの電線でんせんが、空く中うちゆうにあるのを見みつけました。そして、注意ちゆういぶか深く、その線せんの上うえに降おりました。すると、いままで、威勢いせいよく、きらきらと燈火あかりが輝かがやいて、莊嚴そうごんに見みえた都会とかいが、たちまち真まつ暗くらとなつて、すべての機械きかいの鳴なる音おとが、止とまつてしまいました。雷かみなりは、どうしたことかと、びっくりしてしまいました。このと

き、野原のはらのたか高い木立こだちは、
星晴ほしばれのした空そらに、
すがすがしく脊せ伸び
をしたのであります。

——一九二四・七——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

※表題は底本では、「ぴかぴかする夜《よる》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

ぴかぴかする夜

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>